



TITLE:

# 清代華北における差徭と青苗會：嘉慶年間以降の順天府寶坻縣の事例

AUTHOR(S):

小田, 則子

---

CITATION:

小田, 則子. 清代華北における差徭と青苗會：嘉慶年間以降の順天府寶坻縣の事例. 東洋史研究 1999, 58(3): 528-562

ISSUE DATE:

1999-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155264>

RIGHT:

## 清代華北における差徭と青苗會

——嘉慶年間以降の順天府寶坻縣の事例——

小 田 則 子

はじめに

- 一 寶坻縣における差徭
  - 二 鄉村における差徭の徵收形態——按保分派
  - 三 鄉村における差徭の徵收形態——按地攤錢
  - 四 縣政府の動向と差徭
- おわりに

はじめに

清代の華北では、州縣の諸業務に必要な經費の不足を、驛站業務の名目で廣く鄉村に求めることが慣例化していた。差徭とは、本來は驛傳制の運営にともなつて生じた州縣の財源の不足分で、臨時に鄉村に科派された負擔のことを言う。

驛站の諸業務——官文書の送達、官員や軍隊の往來、人犯の護送などが必要とする經費は、本來、當該州縣の財源のなかの編徵驛站原額の名目で定められた規定額（驛站銀）から支出された。しかし、固定的な性格の強い州縣の財源の枠内では、反亂鎮壓などの突發的な驛站の要求に對應することができず、また清初に定められた規定額が、増大する現地の業

務に支障を來すようになると、その不足分は臨時に不正規な徴收として鄉村に求められた。(1) こうした傾向は十九世紀になると顯著となり、差徭は驛站業務にとどまらず、州縣の財源全般の不足を補填する手段と化し、鄉村に對する要求は膨張して、零細農民の窮乏など鄉村に多くの矛盾を惹起したという。(2)

本稿は、州縣が鄉村から徵發するこうした差徭を手がかりとして、鄉村の諸團體（「會」組織）<sup>(3)</sup>や結合と、縣政府（公權力）との關わりについて考察するものである。華北地域の差徭についてはこれまでに、陋規や浮收と並ぶ省以下の地方獨自の財源の問題として、<sup>(4)</sup>或いは清朝の財政構造の特質と附加的な負擔といった角度から議論されてきた。<sup>(5)</sup>しかし本稿では、統治の末端である縣政府と鄉村の基底（科派を受ける農民、或いは彼らの結合）とを關係づける接點としてこれを捉え、差徭という鄉村外部からの壓力が、鄉村の「會」組織や結合に及ぼした影響について検討したいと思う。

差徭は彈力性に乏しい州縣の財源にとって恣意的な徵發が可能で、州縣の業務に不可欠な經費の源泉となっていたが、その一方で、最終的に差徭の負擔を引き受ける農民の側からすれば、それは際限なく時期を選ばずに降りかかる過重な壓力でもあった。一體こうした際限のない過重な負擔に對して、鄉村の側ではどのように對應したのであるうか。窮乏↓逃散、或いは優免を持つ者への依附といった、個々の農民が負擔から逃走する以外の團體的な對處の仕方はまだあまり議論されていないと思われる。<sup>(6)</sup>本文中で述べるように、順天府寶坻縣の場合、農家の外部からもたらされる諸負擔に對して、農民が車會の組織を形成したり、既存の青苗會の結合を利用して負擔の均等化を圖ったりしていた。

十九世紀の初期に直隸省の差徭をめぐる改革論争の中で開陳されたように、<sup>(7)</sup>不正規な財源として膨張する差徭は、小民への皺寄せなど科派の不均衡とあいまって、鄉村に幾多の矛盾を生起した。しかし直接の徵發にさらされる農民は、増大する外部からの負擔に對して、鄉村の結合や「會」組織を利用して差徭錢の工面や負擔の均等化を行ない、鄉村社會の基底の姿を變容させていったという側面も指摘できると思われる。本稿では、鄉村における差徭徴收の實態について紹介し、合わせて「會」組織の一つである青苗會が、差徭の徴收團體として、次第に「村」へと接近していく過程を推測して

みたいと思う。

なお、以下では中國第一歴史檔案館所藏の『順天府檔案』を主要な史料として使用して考察を進めたい。『順天府檔案』には、主に嘉慶年間以降の史料しか残存しないため、<sup>(8)</sup>考察はこの時期以降に限られる。

# 一 寶坻縣における差徭

『順天府檔案』の卷一五三から卷一五九の七卷は、「順天府寶坻縣等の官吏・鄉保が敲詐や勒索を行なう、及び結伙し搶劫することに關する問題の文件」と題されている。ここには、「鄉保」(税糧の督促と治安維持のために置かれた里役)や、「車領」(車輛と馬匹を徵發する差徭を扱う里役)などが、差徭の徵收に名を借りて不正に差徭錢を騙取する(後述)、また差徭の職掌を負擔できず逃亡したり、他者に責任を轉嫁したりする事件の訴狀が多數含まれている。<sup>(9)</sup>十九世紀の順天府の鄉村において、差徭、或いは差徭に名を借りた徵發は、農民にとって大きな負擔を伴う煩瑣な問題だった。

順天府に科派された差徭について、光緒十二年刊本『順天府志』では次のように述べている。

其れ田賦在るの外に、徭に定時無く、役に定里あり。或いは資を攤て差錢と曰い、或いは力を徵めて差夫と曰う。陵差の車輛なれば、則ち旗「人」は三、民「人」は七、其の大較なり。夫と車の外は、<sup>(10)</sup>如くは騾、如くは馬、如くは驢、如くは秣、如くは土坏、如くは柴、如くは炭、如くは煤、如くは灰など、多く定額無し。<sup>(11)</sup>

こうした順天府の差徭の特色は、皇室の陵墓の祭祀、官員や軍隊の往來、官物の運搬など中央政府からの物的な徵發や勞役が、その多くを占めていたことである。例えば、寶坻縣の鄰りに位置する薊州には二十一に及ぶ差徭の項目があったが、そのほとんどが皇室の祭祀と中央政府の諸官廳、軍隊・官員が必要とする物資や勞役だった。<sup>(11)</sup>地方官衙に對する差徭が不正規で名目的なものとして地方志のなかで記述をばかられたことを考慮しても、北京をひかえた順天府という地理的な特殊性が、差徭の内容にかなり影響を與えていたことが窺われる。同様の傾向は寶坻縣の差徭にも共通していた。

寶坻縣の差徭を、中央政府が要求する臨時的な徴收（大差・兵差など）と、縣衙門が科派するもの（雜差）に大別してみると以下のとおりである。前者には、「大小の差徭」、「春秋の大差」、「陵差」、「東陵大差一輛」、「營米を拉運するの車差」、「營米を拉運するの車輛」、「兵差の車輛」、「皇太后の梓宮に大行する天道の差徭」、「梓宮の道を辦するの差」、「道を墊する夫を辦理するの差」、「車・馬の大差」、「會試の差徭」、「壇廟戸の差徭」などを見いだすことができる。皇帝の陵祭や行事に關連した差徭（春秋の大差、陵差）、<sup>(12)</sup> するための公道の補修（梓宮の道を辦するの差、道を墊する夫を辦理するの差）、官物・官兵の往來（營米を拉運するの車差、兵差の車輛）といった差徭が中心で、勞役と車輛・馬匹の提供が多く要求されている。

また後者には、「雜差」、「柴草の各模項の差徭」、「捕廳衙門の草の差」、「鋪倉・倒倉の席片及び柴束の各項の差徭」、「戸口の門牌を清查するの差徭」、「河工併びに蝗蝻を撲捕する人夫の差徭」などがあつた。道光年間初期（一八二〇年頃）に直隸省の差徭輕減についての改革論爭に加わつた張杰は、地方衙門の徴發について「民を累わすこと尤も甚だし」く、「種々の名目は離奇にして古怪なり」と述べている。<sup>(13)</sup>

これら寶坻縣の差徭のなかで、負擔が重く寶坻縣の農民を最も苦しめたのは「車馬の大差」、「兵差の車輛」、「車差」<sup>(14)</sup>などの名目によつて鄉村から徴發された車輛と馬匹の負擔だつた。次に示すのは、寶坻縣内の二十の里の一つである和樂里の幫辦（村レベルで差徭の徴收を扱つた里役）、監生、鄉保などの有力者が、車・馬の差徭を公平化し、削減してほしいと願ひ出た訴えである。

具稟。和樂里の幫辦王秀如、閻靜遠、監生王漢五、王玉堂、閻文禮、謝美生、王培吉、宋維孝、鄉保張明遠。

切。寶邑〔寶坻縣〕は共に四十八保、共に車籤六十八隻あり。身が保は共に大小八庄にして小保に係る。車籤一隻あるも、富足する戸は幾ばくも無し。實に里小にして民窮しきに係る。査すらく、今歲、隨駕の大車四十八輛を奉辦するあり。旗戸の應に車差十四輛を辦すべく、民人の應に車差三十四輛を辦すべきを除き、又た馬差六匹を派辦する

を奉るあり。……「寶坻縣内の」四十七保の内に在りて、秉公に均習し攤派すれば、尙ほ餘に「値年の」七保有り。

今、兵書の陳啓昆は天臺を朦朧し、富を賣り貧に派す。各差を將て濫派して公ならず。……道光九年八月<sup>(15)</sup>。

訴えによれば、和樂里の當該の保は、八つの村庄しかない小保で、「車籤一隻」の差徭の徵發にも十分に支應できない貧窮な有様であるという。今回の「隨駕の大車」と「馬差」の負擔を全縣に公平に割り當てるならば、他に割り當てを受けるはずの値年の保が七つあり、自分たちの保の負擔は輕減されるだろうことを示唆している。こうした差徭負擔の不公平は、「兵書」（兵房の胥吏）の陳啓昆の恣意的な科派と不正に基づくものであり、訴狀では、この文面の後に以下のような續きがある。帮辦の閻靜遠と鄉保の張明遠が、縣城に「夫差」を納入に行った際に（錢納）、兵書の陳啓昆が銀三十兩を詐索しようとし、もし支拂えば「馬差」を免じてやると持ちかけた。しかし和樂里は貧しく、陳啓昆の誘いに應ずることができなかったため、現在、「馬差二匹、隨帶工料六十餘日」の重い負擔を受け、逆に「伊れの管する所の崇智等の里は、大保も均しく車馬の差徭無し」という不公平な状態であるという<sup>(16)</sup>。

以上の文面では、胥吏の中飽行爲とそのために生じた差徭負擔の不均衡とが、弱小な里や保の農民に困窮を招いていたことがわかる。次節では、こうした差徭が實際にどのように徵收されていたかを見ていくこととしたい。

## 二 鄉村における差徭の徵收形態——按保分派

寶坻縣の鄉村で差徭を徵收する方法には次の二つがあった。第一は「按保分派」と呼ばれる方法で、本來は「車會」という農村組織があり徵收に關與したと考えられる。第二は「按地攤錢」「按畝攤派」などと記される方法で、同治年間以降には、差徭の割り付けと徵發に、作物の監視團體である「青苗會」が關與するようになった。本節ではまず按保分派について述べ、次節で按地攤錢について取り上げることとしたい。

以下の文書は、寶坻縣の民婦張李氏が差徭の苛斂を訴えた訴訟に關連して、差徭錢を貪得した張太來がすでに別件で杖

枷に擬せられていることを報告した「詳文」（州縣から府への上行文書）の草稿（稿）の一部である。道光年間（一七九六—一八五二）より以前、興保里内の保では次のように差徭を割り當て徴収していた。

該縣（寶坻縣）の辦差の舊章は、向て保を按じて分派する（按保分派）に係る。興保里の一保、連霍庄共有□□□□庄、計一百一十五厘の股分あり。仍お村庄の大小を按じて認を分ちて派辦し、村毎とに數厘自り十數厘に至る。□□□□□□家庄は、四厘の股分に係る。保毎とに車領一二人を選充し、差股を分派するを經理す。各村に又た幫辦有り。里下に在於いて差錢を斂辦し、或いは郷保に交たし、或いは原催の差役に交たし、經收して差に應ずるに備辦す。……道光十九年七月三十日。<sup>(18)</sup>

破損して文字を読み取れない部分があるが、ほぼ次の内容がわかる。興保里の當該の保は「一百一十五厘の股分」を支辦し、「村庄の大小」に應じてこれを割り當て、末端の村庄では「村毎とに數厘自り十數厘」の負擔を受けていた。また「車領」「幫辦」という職役があり、差徭の割り當てと徴収に關與していた。同じ興保里の閭皮庄の事例を参考としながら、さらに考察してみよう。嘉慶十五年（一八一〇）に閭皮庄では、差徭の未納分の取り立てをめぐり諍いが起きた。

具稟。閭崇義、「年」五十二「歲」、興保里閭皮庄「に住む」。

切。身が庄、原より車會有り。内より又た股三厘を出して、差務を幫辦し、從て未だ公務を悞らず。昨に官府の票を蒙り、郷保の楊起鳳をして陵馬の差を備辦せしめよとあるに因る。楊起鳳の弟楊五の云稱するに據れば、伊れは已に「馬匹を」雇辦し、其の馬の價は錢九百餘千を需要すと。即ち身が里二十六庄、共に車股一百一十五厘に按照し、合わせて身が庄は三厘と算う。身れが應に一厘を辦すべく、尹姓が應に一厘を辦すべく、閭康侯が應に一厘を辦すべく、「一」厘毎とに錢八千を設てて出し、已に車領の張俊林に錢二十千文を交せり。錢四千文が下欠するは、尹姓の短欠する所に係る。詎らん楊五は硬に身れに向かい要刻して容緩せず、身れは理講し伊れは觸怒し、即ち身れを將て揪毆す。……<sup>(19)</sup>

嘉慶十五年三月。

この文面によれば、興保里では「一百一十五厘」の「車股」を支辨し、閭皮庄の分擔は「三厘」だった。今回、「陵馬の差」の徴収に当たり、郷保の弟楊五が馬匹を雇う差徭錢を要求した。閭皮庄では三厘の負擔を、訴狀を提出した閭崇義、尹姓、閭康侯の三人（戸）が一厘ずつ支拂い車領に渡したが、楊五は尹姓がまだ支拂わない差徭錢の残りを無理やり徴収しようとして閭崇義と諍いになっている。

さて以上の二つの事例から次のことがわかる。第一に、興保里或いは里内の保では「股分」「車股」で敷えた差徭を支辨していたことである。股分・車股とは、車輛と馬匹の差徭（大差）の負擔を示す數値と見られ、<sup>(20)</sup>車馬の差の負擔を受ける農家を「股内」「股裏」、車馬の差は負擔せず、雜差を支拂う農家を「股外」と稱した。<sup>(21)</sup>「一百一十五厘」の股分・車股は、先の「詳稿」では保の負擔となっているが、閭皮庄の事例では里の負擔となっており、里内の保が輪番で支辨したとも推測される。

これらの股分・車股は村庄の大小を考慮して末端の村庄に割り當てられた。一つの村庄には數厘から十數厘の股分・車股の割り當てがあり、村内の有力な農家がそれを負擔した。閭皮庄では、閭崇義・尹姓・閭康侯の三戸が一厘ずつ負擔し、三厘の割り當てを支辨している。ただし、これら三戸の農家のみが支辨して、實際に差徭錢を負擔したかどうかは疑問である。<sup>(22)</sup>閭皮庄の事例の「原より車會有り」という記述と考え合わせれば（後述）、これらの名前は差徭を納入する農家の名義、或いは代表者名だったとも判斷できよう。なお差徭は錢納で、閭皮庄の事例は一厘當たり銅錢八千文だったことがわかる。

第二に、これらの差徭を徴収するに當たり「車領」「幫辦」という里役があった。「詳稿」によれば、車領は一保につき一二人置かれ、幫辦は村庄ごとに一數名置かれていた。<sup>(23)</sup>車領は保が支辨する股分・車股を有力戸に割り當て（差股を分派するを經理す）、幫辦が村レベルでの徴収を行なった（「里下に在<sup>ル</sup>いて差錢を斂辦<sup>ス</sup>す」）。徴収された差徭錢は、幫辦から車領或いは郷保や差役に支拂われた。



ただし同じ差務でも雑差（縣衙門の臨時的な徴收）は、牌頭・甲長が取り扱った。道光二十三年（一八四三）の慈恩里における車領鄧立山の訴狀では、「凡そ雜項の差務に遇はば、各庄の牌頭・甲長の擲辦する有り、如し車馬の大差に遇はば、身れが各幫辦と同じ股〔分〕を按じて攤墊し、以て上は公を悞らず、下は民を累せざる可し」と述べている。<sup>(24)</sup>

車領と幫辦は車馬の大差を徴收するために置かれた里役であり、保（里）の差徭を立て替へ拂いした（攤墊）。傷害事件の犯人の搜索や護送などの雑差は、郷保の指示で牌頭・甲長が擔當している。<sup>(25)</sup>

第三に閭皮庄には、差徭を徴收するために「車會」という組織があった。「車會」の名稱は、もともと農民にとって最も負擔の重い車輛と馬匹の差徭に對處するための組織に由來すると推測される。表1は車會・車股・股分について觸れた訴狀の内容をまとめたものである。①、②、⑦、⑩が車會の存在を示している。

寶坻縣の郷村では、郷保が缺員になった場合、里内の有力者が相談して新しい郷保を推舉することが通例であり、新たな郷保が決まると推舉した者の名前で保證書（保狀）を縣政府に提出する習慣があった。<sup>(26)</sup> ⑦と⑩はこうした郷保の選出に關わる文書である。まず⑦には「車會の士庶人等」とあり、車會は「士庶人」（下層紳士や有力農民）を含めた組織だったと考えられる。

具保狀、興保里の車領于大湖、幫辦張興恩・于大保、書手劉保雲。

今保狀を與うるの事に於いてす。以奉して保し得たり。切。本里〔興保里〕の郷保王景春は潛逃し斥革さる。票を蒙りて、書手劉步雲、車會の士庶人等を會同し、秉公に妥人を議舉し郷保に接充して辦公せしめよとの等因なり。……  
道光十二年四月二十日。<sup>(27)</sup>

⑩の場合は、缺員になった郷保の選出を願いでた請願の文書で、そのなかに「恩諭を懇い、書手は車會を會同し、別に妥人を派し、郷保の公事に接充せしめよ」とある。<sup>(28)</sup> 道光年間から咸豐年間（一八二一～一八六一）において同様に郷保の選出を願い出た文書では、車會に相當する部分に、車領、幫辦、郷保、「士民人」（紳民人）などの文句が見られる。<sup>(29)</sup> 従っ

表1…按保分派による差徭の徴収

時期と場所	関連語句	提訴人	訴訟及び報告の内容	出典
① 嘉慶元年九月 德義里	「車會」 「車頭」	車頭鄧昌太 民人楊子謙 その他	もとの車領で已革された黨樹が車差を包攬した。黨樹は従九品職員であることを利用し、もと車領だった時に徴収した金銭の受け渡しに不正があり、また車頭の鄧昌太とともに不正に農民に車差を科派している。一方車頭の鄧昌太はそのような事實はないと反訴している。	卷一五三
② 嘉慶十二年十一月 尙節里	「出股」 「車會」	車領趙殿三	車領が革退を願い出た文書。 趙殿三は年老で息子が瘋症のため、車領の職務を果たせないことを理由に革退を願い出たもの。	卷八七
③ 嘉慶十五年三月 興保里閭皮庄	「車會」 「車股」	民人閭崇義	興保里には車會があり、閭皮庄には車股三厘の割り當てがある。現在、郷保の弟が車錢を要求しているが、閭皮庄の負擔する二十四千文のうち二十千文はすでに車領に手渡ししており、欠錢は村内の尹姓が支拂わないためと訴えている。	卷二四八
④ 嘉慶十九年二月 場所不明	「又辦理兵車、 不在股分之内 散戶」	職員馬德駿・吳 天盛	甲長の趙鳳九が差徭を徴収。趙鳳九は戸口の造冊を編寫する公費を集め、また兵車を辦理する經費を徴収するのに、股分の内になく、これまで差徭錢を出さなかった者からも一緒に徴収しようとしたとする訴狀。	卷一五三

⑤嘉慶十九年四月 場所不明	「車領」 「拉運營米車輻」	民人韓壽占・王德乾・李北陽・李乾陽	和息の稟狀。鄉保の李龍が、民人薛八の車輻を營米を拉運する差徭のために雇おうとし、それに相應する差徭錢を要求。その後、車輻は不要になったがさらに差徭錢を要求して諍いとなった。	卷二〇〇
⑥道光九年八月 和樂里	「車籤」	幫辦王秀除・閻靜遠 監生王漢五 他民人王玉堂等 五名 鄉保張明遠	馬差の不公平を訴えた訴狀。和樂里の當該の保は八庄で車籤一隻の割り當てがあるが、里は小さく民は貧窮で對應できない。廣川郷にはなお他に七保あり公平に均攤すべきである。兵書の陳啓昆は、幫辦と鄉保に銀三十兩を要求し、支拂えば馬差を免じることを持ちかけた。	卷一二三
⑦道光十二年四月 興保里	「車會」	車領于大湖 幫辦張興思・于大保 書手劉步雲	新任の鄉保に對する保狀。前鄉保が行方不明で斥革されたので、書手劉步雲は、興保里の車會の人々とともに公平に適任者を選任した。新任の鄉保の張保について連名で保證した文書。	卷八九
⑧道光十四年六月 興保里	「散股之家」	車領劉名遠 幫辦邢貴	鄉保が逃亡したので、新たに推舉することを願ひ出した報告文書。現在、鄉保が不在のため、從來鄉保が行なっていた差務は書手が代行している。しかし牌頭・甲長など皆が鄉保の推舉を忌避して行なわない。車領・幫辦は大差を辦理し、雜差は里のなかの散股の家が辦理する。	卷九〇
⑨道光二十二年二月 慈恩里	「股裡幫辦」 「股外之人戸」	車領鄧立山	鄉保が行方知れずのため、新たに推舉を願ひ出した報告文書。牌頭・甲長は股外の人で數がそろわない。	卷八九

	<p>「車會」</p>		<p>雜項の差務は牌頭・甲長が擔當するが、車馬の大差は車領と幫辦が擔當する。郷保の不在は大差の辦理に支障を來す恐れありと訴える。</p>	<p>卷一五四</p>
<p>⑩道光年間 興保里黃庄</p>		<p>民人孫連生</p>	<p>郷保が不在のため、書手と車會の人々で新任の郷保數名を推舉したが、いずれの者も着任することを願われない。また各村の理事人も新任の郷保に對して保狀に名前を連ねることを忌避して集まろうとしない。</p>	<p>卷九〇</p>
<p>⑪年月不明 尙節里</p>	<p>「分股裡・股外」 「股外差務」</p>	<p>車領邵純修 幫辦鄧永寬 他民人七名</p>	<p>尙節里の郷保は職務を誤り枷號拘束されている。本里の夫差と車差は股裏、股外に分けて奉辦している。また股外の差務は郷保が辦理すべきであるが、現在、差務を取り扱う者がいない。</p>	<p>卷九〇</p>

## 〔出典〕

- ① 「爲回明事」 「爲包攬車差、合謀抗騙、懇恩查案訊究事」  
 「爲備陳下情、叩懇電鑒作主訊斷事」 他
- ② 「爲陳明下情事」 「爲陳明下情、念老子瘋、難以辦公、懇恩電鑒准退事」
- ③ 「喊稟事」
- ④ 「爲公叩 仁慈俯念、共鄉愚細故業經、查明處結處恩准免訊事」
- ⑤ 「爲公叩 仁慈俯念事、經處結、恩准免訊銷案事」
- ⑥ 「爲稟明派差不公、叩 恩俯念、里宿民窮、恩准減馬差事」
- ⑦ 「與保狀事」
- ⑧ 「爲稟明下情、叩 恩差傳、訊飭公舉安人、接認鄉保事」
- ⑨ 「爲遵傳稟明下情、叩 恩俯准、差傳各庄牌甲、股裏幫辦、公舉鄉保事」
- ⑩ 「爲陳明下情、懇 恩諭飭書手會同車會、另派安人、接充鄉保公事」
- ⑪ 「爲公叩 仁慈各外施恩開釋事」

て、車會はそれらの里役や下層紳士・有力農民など、里内の有力者が参加した組織だったと考えられる。

また②の史料では、乾隆年間後半（十八世紀後半）に尙節里に車會があったことがわかる、嘉慶二十二年（一八一七）十一月における尙節里の幫辦車領の趙殿三の訴狀のなかに、「切おんこう。身が里、乾隆三十年自より□□車會有り、身われ即ち幫辦車領に係れば、凡そ差に遇はば、踴躍して差を辨わぜざる無く、從かつて未だ公を悞あやまらず。」とあり、乾隆三十年（一七六五）以降、尙節里に車會があったことがわかる。

さらに、①では「車頭」の存在を知ることができる。この一件文書は破損が多く断片的にししか出来事の内容を窺うことができないが、以下のような次第だった。乾隆五十九年（一七九四）から嘉慶元年（一七九六）において、徳義里で差徭の包攬事件が発覺した。この事件は、革職されたもと車領の黨樹が従九品職員であることを利用して車馬の差徭を包攬し、車股の割り當てのない農民から車錢を騙取しようとしたものである。車頭の鄧昌太は黨樹とともに着服に加擔し、新たな郷保の王君度との間で車錢の受け渡しに不正があったものと見られる。

……去歲に于おいて、伊かれ〔黨樹〕、車頭鄧昌太とともに車差を包攬す。身われ前項の錢文を理問するに、詎なんどらん伊かれ頂帶に倚恃し、反りて恃横を行ない、百般侮罵せり。……嘉慶元年九月。<sup>(31)</sup>  
 ここでは「車頭鄧昌太」の存在を確認することができる。<sup>(32)</sup>

具呈。民人楊子謙、年三十三歲。

……從九品職員黨樹、頂帶に倚恃し、常に官吏を告いい、肆に訛詐を行いう。伊かれ車差を包攬し、里下に在りて横斂し、撞騙吞肥だましちやくふして、良善を欺壓す。身われ家貧に歸し、向かつて車股無し。去歲〔乾隆六十年〕の十二月二十日に于おいて、伊かれ〔黨樹〕口稱すらく、身われ車股一股を欠くに該あたり、應に東錢二十七千を出すべしと。〔黨樹は〕硬むじに身われに向かい訛索せんとす。身われ本より車股無く、伊かれに車簿を查看するを央おうに、伊かれ觸怒して身われを將て百般威嚇せり。……嘉慶元年九月。<sup>(33)</sup>

二十世紀初頭の農村實態調査によれば、村内の「會」組織や結合で、それを運営する中心となる世話役のことを「會頭」「會首」「香頭」などと稱した。「頭」は「一般の人よりも上に立つ」人の意味である。<sup>(34)</sup>「車頭」とは車會の世話役ではなかったかと推測される。また史料の後半では、車股の無い楊子謙が「車簿」を見せるように黨樹に要求して諍いとなっており、本來は車股ありと「車簿」に登録されている農家から差徭が徴收されたことがわかる。<sup>(35)</sup>またこれと関連して、④には「股分の内に在ざる散戸」という文句が見られる。

具稟。職員馬德駿・吳天盛。

緣。趙鳳九は甲長に膺充し、本より庄衆人等に向かいて操項の差錢を攢擲す。戸口を編寫し冊を造るの公費有りて、戸毎とに大錢一二十文に過ぎずと雖も、又た兵車を辦理するあり。股分の内に在ざる散戸、未だ經て錢を出さざる人も、趙鳳九は一併に攢擲す。……嘉慶十九年閏二月二十五日。<sup>(36)</sup>

④の訴狀は、甲長に任ぜられた趙鳳九が「戸口造冊」の雑差の經費を村庄内から集金する際に、「兵車を辦理する」と稱して、これまで大差の差徭錢の割り當てのなかった農家からも不當に徴收しようとしたという訴えである。「散戸」とは、「會」「社」などの組織や結合に参加した世話役ではない一般戸をさす。<sup>(37)</sup>「股分の内に在ざる散戸」とは、股分や車股をその名義に割り當てられていない農家（車馬の大差を支辨しない農家）で、車會に参加した一般戸ではなかったかと推測される。

以上、嘉慶、道光年間の寶坻縣の鄉村では、里或いは保で一定数の股分・車股を支辨していた。この負擔は村庄の大小（糧地や人丁數など）に応じて割り當てられ、末端の村庄では特定の農家の名義のもとに差徭錢が支拂われた。股分・車股の割り當てと徴收のために、各保には車領・幫辦が置かれた。車會はこれらに關連して、保（里）や村庄で實際に差徭の經費を負擔し徴收した組織だったのでなかろうか。その運營形態の詳細は把握できないが、世話役の車頭と一般戸の散戸から組織され、車會の内部で差徭錢を徴收し工面したと考えられる。

### 三 郷村における差徭の徴收形態——按地攤錢

さて、今一つは「按地攤錢」「按畝出錢」「每畝攤派」などと呼ばれる形態である。次に示すのは、咸豐五年（一八五五）の厚俗里大高庄での出来事で、過重な差徭の要求がつぎつぎと村庄に降りかかったという訴えである。

具稟。王遠明、年六四歳、厚俗里大高庄に住む。

情緣。身が大高庄は共に地十三頃有り。各おの種地の家、差に遇はば畝を按じて錢を出し、敢えて違抗する無く、分文も欠かず。意わざりき、王義路は富を爲して仁ならず、貪得して厭う無し。咸豐四年九月の底、伊れは差錢二百餘吊を墊陳すべしと云う。身れは衆首事人と共に錢を將て數の如く擇め訖わり、伊れに交して收去せしむ。今歳九月十八日に至り、又た差錢七百餘吊を墊陳すべしと言う。身れは衆首事人と共に何なる差なるやを知らず、伊れに何なる項の差務に係るやを問う。伊れ言えらく車馬の差錢に係ると。郷保の馮起浮等の説合を経て、身れ等をして伊れに東錢三百吊を給せしめんとす。……咸豐五年十月<sup>(38)</sup>。

大高庄の事例から次のことがわかる。第一に、「各おの種地の家」が「畝を按じて錢を出す」という方法で差徭錢を負担していたことである。按地攤錢、每畝攤派とは、家畜や車輛などを含めた農家の資力に關係なく、糧地或いは耕作地一畝当たりについて均等に差徭を負担する方法を指す。第二に、大高庄で差徭を徴收しているのは複數の「首事人」（「衆首事人」である。首事人とは、村庄の世話役で、村廟の補修、橋や村道の管理など村庄の公共業務を擔當した自生的な郷村の指導層である。<sup>(39)</sup>）。

道光年間（一八二〇～一八五〇）にさかのぼるが、同じ厚俗里の郷保袁天榮の報告によれば、村庄の首事人が負擔する差徭は、郷保によって里内の村庄に割り當てられたものだった。

具稟。厚俗里の郷保袁天榮。

切。<sup>おもひごとく</sup>春自り今に至るまで、兵差並びに各雜項の差務を奉辦し、俱に皆な算明し、九庄に應じて均攤す。査すらく、西河務庄の首事袁昌安、袁可允、肖家塹の于福堂、劉舉人庄の芮汝良、……（中略）……黃辛庄の王瑞發・梁洪如、地畝を經管し差務を辦理す。身れが屢び催がすを経て、張峯庄の徐俊如が遵辦して清交するを除くの外、惟だ黃辛庄の王瑞發・梁洪如は、抗して遵辦せず、分文も出さず、拘するに非ざれば、辦差する能わずと云稱す。其れ西家務等の庄の首事袁昌安等、均しく皆觀望して辦ぜず、身れをして累を受けしむ。……道光年間。<sup>(40)</sup>

袁天榮の報告によれば、彼は里内の九つの村庄に「兵差並びに各雜項の差務」を均等に割り當てたという。配下の村庄の「首事」は彼の要求に従い、「地畝を經管し差務を辦理す」る<sup>(41)</sup>（按地攤錢）べきであるが、黃辛庄の首事人王瑞發・梁洪如が指示どおりに辦差しようとせず、西家務庄など他の村庄の首事人もそれを見て様子を窺い、袁天榮を巻き添えにしているという。この報告では、村庄の首事人が負擔すべき差徭を支拂おうとせず、鄉保の袁天榮は差徭の職責を果たせないと訴えている。

以上の二つの事例から、按地攤錢の場合、里に科派された差徭を鄉保が村庄に割り當て、末端の村庄では首事人が土地數に應じて差徭錢を徴收していたと判斷される。

こうした土地數に應じた差徭徴收の形態は、股分・車股を有力戸が負擔する形態（按保分派）とともに古くから鄉村では實施されたと考えられるが<sup>(42)</sup>（後述）、寶坻縣の鄉村で廣く見られるようになるのは、同治年間（一八六二～一八七四）のことで、差徭錢が「青苗會」の青苗錢と同時に徴收されるようになってからである（表2）。

青苗會とは、鄉村で作物の收穫期（六月の麥秋と九月十月の大秋）に盜難を監視するために組織される團體である。青苗會では、參加した農民から「青苗錢」「青錢」を集め、監視人（看青人）<sup>(43)</sup>を雇い作物の監視を行なった。

表2は、按地攤錢、按畝攤派などの形態で差徭が徴收された事例をまとめたものである。ほとんどの場合、差徭は青苗會の活動の中に含まれている。この中から代表的な事例を見てみよう。同治年間に、孝行里齊各庄の青苗會では、青苗錢



表2…青苗會における差徭の徴収

時期と場所	徴収方法	青苗圈と青苗錢及び訴訟の概要	青苗錢の使途	出典
①道光二年八月 好禮里大藍各庄	「按每畝斂去」	青苗錢は麥子一升四合で、共計で麥子二十餘石を徴収。青苗錢のなかに夫差の錢文を合わせて徴収することは不正とする訴え。	「看青の價値」 「道夫の差を辦ずるの錢文」	卷九八
②道光二十五年九月 月務本里圈子庄	「按地畝出錢」	青苗圈地は二二頃。去年の大秋、畝毎に糧二升半を徴収、今歳は毎畝糧一升を徴収。首事人が、青苗錢のなかに含まれる郷保の辦差の費用を着服したとする訴え。	「看青人の工價」 「青苗會事の飯錢」 「郷保の辦差」	卷一〇〇
③同治二年六月 孝行里齊各庄	「毎年每畝、出東錢一百」	青苗圈地は四〇頃餘り。首事二十人で值年を輪流し、五人一年で辦公する。青苗錢は每畝一百文で合計四百餘吊。首事人が引繼ぎの際に青苗會の經費を着服し、青苗地帳に不正があった。	「車馬の各差を辦理す」 「修道」 「堤埵」 「看青の工錢」 「青苗會の席を立てるの錢」 「辦差」	卷一三二
④同治二年九月 好禮里藍各庄		青苗圈地は三〇頃餘り。 本庄人の本圈で種地する者は首事人に看青錢を支拂う。外庄人の本圈で種地する者は看青人に看青錢を支拂う。看青人の取り分をすべて村の看青錢としたため首事人と看青人の間で訴訟となった。	「看青の工錢」 「辦差の費」	卷一〇三

<p>⑤同治三年六月 尚節里商王洵庄 太平庄</p>	<p>「俱按地畝公攤、其來已久」</p>	<p>二庄で青苗圈一圈を形成する青苗會。商王洵庄の青苗圈地は一七頃四〇畝、太平庄の青苗圈地は七頃六三畝。青苗錢は一畝當たり六〇〇文。二庄の間で差徭錢の負擔額について諍いがあり、二庄の青苗會が分圈しようとして訴訟となった。</p>	<p>「大小の差務」「兵車を奉辦す」「雜項の差務を辦理す」</p>	<p>卷一〇四</p>
<p>⑥同治四年五月 尚節里郭家庄 褚家庄 高家庄 頃洵庄</p>	<p>「差務出地畝」</p>	<p>四庄で青苗圈一圈を形成していたが、今年分圈して別々に作物の盜難を管理することとした。褚家庄の農民褚昆の土地が郭家庄の青苗圈内にあり、作物の盜難の處罰をめぐり諍いが起きた。</p>	<p>「差務は地畝より出す」</p>	<p>卷二二七</p>
<p>⑦同治四年十月 尚節里西馬各庄</p>	<p>「按地攤派青錢」</p>	<p>青苗圈地は三八頃餘り。每畝攤錢は三三五文一三七〇文、合計の經費は一七二五吊、さらに外庄の幫貼錢二八〇吊一三〇〇吊あり。青苗地帳が不正で青苗錢の着服があった。青苗錢の引き繼ぎについて首事人の間で諍いが起きた。</p>	<p>「人を雇いて看青す」「辦公の花費」「人を雇いて支更す」「團練の花費」 （「差務」）</p>	<p>卷一五七</p>
<p>⑧同治五年七月 嘉善里堅庄</p>	<p>「按畝攤給差錢」</p>	<p>城内に居住する童生の訴え。童生の土地一頃三六畝は堅庄と張各庄に分散しており、各々の青苗圈内で入圈し、他の地畝に倣って按畝攤給で青苗錢を支拂っている。首事人が不當に錢文を要求したとする訴え。</p>	<p>「差錢」</p>	<p>卷三三一</p>

## 【出典】

① 「爲邊 批陳明訛賴捏控叩 天電鑒傳訊察究事」

## ② 「爲賊具事」

③ 「爲倚恃首事捏詞、妄懇 恩添傳質訊、以辨眞僞事」

⑨ 同治九年五月 厚俗里劉舉人庄	「按地攤辦車差」	庄内の後街には十年にわたり隠地十頃餘があり、今年青苗會帳に記入した。しかし、後街の首事人は隠地の青苗錢を支拂わず、車差の錢文も渡さないとする訴え。	「一切の花費」 「廟に在りて席を設ける」 「車輛の差務」	卷二三〇
⑩ 同治十二年七月 德義里九王庄 馬營庄 張舉人庄	「按畝攤錢」	馬營庄の青苗圈地は十五頃。「青苗會規」があり、耕作している青苗圈で青苗錢を支拂う取り決めである。以前、九王庄と馬營庄等は一緒に青苗圈を形成し青苗錢を徴収していたが、去年分圈した。馬營庄は分圈を不利として訴訟を起こした。	「巡青の工錢」 「修堤の錢文」 「河工錢」 「各項の差務」	卷一〇三
⑪ 光緒四年七月 尙節里邵家鋪庄	「每畝攤措青錢」	一畝當たりの青苗錢は一八〇文、村の合計一千四百餘吊。辦會事人（首事人）が附近の開墾を修築する經費を着服し、河水のない時期になっても一年以上、工事を始めようとしな	「各項の差務花費」 「開墾坍塌」	卷九四
⑫ 光緒二十三年四月 月尙節里老辛庄・ 張家庄・榮各庄・ 董庄・袁庄・大庄・ 劉庄・馬辛庄	「每畝攤拿」	八庄が形成する青苗會、青苗圈地六十頃。每畝當たり二〇〇文を徴收。あらゆる差務の經費は青苗錢から出す。 郷保の王順卿とその叔父で苑家庄首事人の王國相が何度も不當に差徭の錢文を要求した。	「春秋の大差」 「營米の車差」 「雜差」 「三官廟を公修す」 「洩水の開口」	卷九三

- ④ 「爲兇徒攪亂公務、持刀尋衅、叩 恩作主訊究事」
- ⑤ 「爲違批再稟下情事」 「爲公稟下情事」
- ⑥ 「爲稟覆事」 「爲訴明事」
- ⑦ 「爲搜吞青苗圈錢、理問待橫、並不清算、叩 懇恩准傳案訊飭清算事」 「爲再陳搜吞青苗地、餘存錢文、並不支更、亦不團練、叩懇恩准訊追事」
- ⑧ 「爲捏開地畝多派青苗圈地錢文、理問待橫、毆辱斯文、叩 懇 恩准傳訊斧斷事」
- ⑨ 「爲公稟攪亂青苗會事、車輛差務、懇 恩准傳訊追事」
- ⑩ 「爲再陳下情懇 恩迅速賞斷事」 「爲再陳下情事」
- ⑪ 「爲首事朦弊合謀昧良、搜吞錢文、並不修公、懇 恩俯准傳案訊追事」
- ⑫ 「爲夥充鄉保、訛借擾累、懇恩作主傳案訊究事」 「爲違批訴明下情事」 「爲公同備陳原委員叩 恩核奮訊究事」

のなかに差徭や村の公共業務の經費を含めて徴收していた。

具稟。民人王福林、年七十歳、孝行里齊各庄に住む。

情緣。身が庄に首事二十人あり。輪流して值年辦公するは、五人一年なり。毎年六月十五日、接替の前の三兩日に、牌〔頭〕・甲〔長〕は衆首事に請いて、正覺寺に至らしめ清算す。身が庄の〔青苗〕圈地は四十頃零りあり。毎年、畝毎とに東錢〔銅錢〕一百文を出し、共に錢四百餘吊を擲む。牌〔頭〕・甲〔長〕が催し擲め、值年の首事に交たし、車馬の各差を辦理し、修道、搭捻の花用とす。前に六月十五日に於いて、身れの子王仲は牌頭に係り、願得福は甲長に係れば、衆首事を將て請いて寺中に至らしめ清算せんとす。詎ぞ料らん〔前首事の〕孫仁齋は擲む所の錢文を將て己に入る。……現ま票を蒙りて車差を辦理せしめよとあり。郷保は催して牌〔頭〕・甲〔長〕に錢を要む。〔值年の牌頭の〕身れの子等、孫仁齋に問うに、共に錢四百餘吊を擲め、看青の工錢九十吊、青苗會の席を立つるの錢二十吊を除き、下存の錢二百九十餘吊は、理應に辦差すべしと。奈ぞ伊れ錢もて交たさず、反りて嗔怒を生ず。……同治二年六月。

齊各庄では毎年六月に前年と當年輪番の首事人の引繼ぎが行なわれ、その二三日前に、首事人二十人が寺廟に集まり、差

徭錢を含めた青苗會の經費の帳目を清算する習わしだった。この青苗會には青苗圈地が四十頃餘りあり、一畝當たり錢一百文を集め、看青（作物の監視）の活動に使用する以外に、車馬の各差、村道の修理、堤防の補修など、差徭と村庄の公共業務の費用としていた。文面の後半によれば、今回の車差を辦理する經費として、「看青の工錢」（看青人の賃金）と「青苗會の席を立つるの錢」を差し引いた餘剩を充てるはずだったが、前年の首事人の孫仁齋が青苗錢を着服して金錢の引繼ぎをしようとせず諍いとなっている。

またこの事例では、郷保、牌頭・甲長、首事人が青苗錢、差徭錢の徴收に關わっている。通常の青苗會の經費（差徭も含めて）は、牌頭・甲長が徴收し首事人が費用を受け取った。車差の差徭錢は、郷保が牌頭・甲長に催促している。

次の事例は、同じ同治年間に好禮里藍各庄で、青苗錢からまず看青人の「工價」（賃金）を支拂い、その残りを辦差の經費とすることになった次第を述べたものである。

具呈。旗人趙明、年七十歲、好禮里藍各庄に住む。

切。<sup>おもしろく</sup>本庄は一圏なり。共に地三十餘頃有り。每年秋の間に劉德福・楊富有を僱いて看青し、共に「看青人の」工價の

東錢は六十吊なり。本庄人の本圏の地畝を種やす者は、青錢もて本庄の首事人の經管に歸し、外庄人の本圏の地畝を種やす者は、青錢もて看青人の討要に歸す。今、差務の繁多なるに因りて、身<sup>わ</sup>れは本庄首事人の劉德新・白鳳文・劉

振德・趙洪生・劉鐸等と公議すらく、外庄の地畝を將て全て本圏に於いて歸し、看青人の錢を要<sup>もと</sup>むるを准さずと。本

圏の首事人由<sup>よ</sup>り糧を撐<sup>あ</sup>め、看青「人」の二人に工錢九十吊を給すと言明せり。看青の工價を除くの外、下餘の錢文は

以て辦差の費と作す。劉德新等の證す可き有り。現在、首事「人の」劉德新等は外庄に赴きて糧を撐<sup>あ</sup>む。……同治二年九月。<sup>(45)</sup>

藍各庄の青苗會では從來、「本庄人」で藍各庄の青苗圈に参加し耕作している者は、青苗錢を藍各庄の首事人に支拂い、「外庄人」で藍各庄の青苗圈に土地を持ち耕作している者については、看青人の取り分となっていた。しかし「差務が繁

多」なので、首事人が合議して「外庄人」の土地の青苗錢も監各庄の首事人が徴收することとし、看青人には別に「工價」を支拂うことと取り決めた。このため、看青人と首事人との間で諍いが起きたというのが、この訴訟の次第である。訴狀の後半に「看青の工價を除くの外、下餘の錢文は以て辦差の費と作す」とあり、青苗會の經費が差徭を含んでいたことがわかる。

さて表2の諸事例から、次のような内容を知ることができる。まず第一に、差徭は青苗會の青苗錢（本來は監視人を雇う經費など青苗會の運営費）や村の公共業務の經費に含めて徴收されたことである。通常の青苗錢は一畝当たり五十文前後だが、<sup>(46)</sup>差徭を含めた事例では、數倍～十倍餘りになっている。例えば尙節里商王洵庄では六百文<sup>(5)</sup>、同じ尙節里の老辛庄・張家庄・榮各庄など八つの庄が組織した青苗會と邳家鋪庄では、それぞれ二百文<sup>(12)</sup>と一八〇文<sup>(11)</sup>、孝行里齊各庄では一百文<sup>(3)</sup>だった。

差徭を含めた徴收では、過重な負擔となつていく傾向にあったと考えられ、<sup>(47)</sup>これは穀物で徴收される場合も同様だった。<sup>(48)</sup>しかし直隸省の差徭は、山西省や陝西省に比較して相對的に輕かったこと、また青苗會によつて一畝當りに割り當てられるという均等な負擔の保證（公平性）が、<sup>(49)</sup>過重な徴發に對する農民の逃亡や訛詐に齒止めをかけ、支拂いのある程度保證していたと考えられる。

第二に、青苗錢に含まれた差徭の項目には、兵車や車差など車輛と馬匹の徴發（大差）と縣衙門の徴發（雜差）が區別されることなく一括されていることである。表2の青苗錢の使途を見ると、「道夫の差を辦ずるの錢文」<sup>(1)</sup>、「車馬の各差を辦理す」<sup>(3)</sup>、「兵車を奉辦す」<sup>(4)</sup>、「大小の差務」<sup>(5)</sup>、「車輛の差務」<sup>(9)</sup>、「春秋の大差」<sup>(12)</sup>、「營米の大差」<sup>(12)</sup>など中央政府に對する差徭と、「雜項の差務」<sup>(5)</sup>、「各項の差務」<sup>(10)</sup>、「雜差」<sup>(12)</sup>など縣衙門の徴發は、徴收者や支拂い方法などで區別がない。ともに錢納のため區別する必要はなく、實態は最初に見た大高庄の事例のように、村庄レベルでは次々に要求される差徭の項目もわからないということもあったと見られる。

第三に、こうした差徭の徴収には、村庄の首事人や辦事人、或いは青苗首事人、經管青苗人など青苗會の世話役、牌頭・甲長、鄉保が當たった。例えば、嘉善里の十七の庄の首事が連名で提出した訴狀には、「縁ことしのじ・身からだれ等均しく首事に係り、庄中の公事は踴躍して辦理す。本里の鄉保崔景祥……絶えて怠惰する無く、大小の公事に遇う毎とに、伊かれ必ず身みれ等首事に向いて商酌し、所有おちゆうる攤辦ちやうはんせし差務の出入も一清し、並なべて民財を苛斂し、己おのれを肥やす處無し」とある。<sup>(50)</sup>この場合鄉保は、差徭の徴収など「大小の公事」を常に首事人に商酌し相談している。

また務本里圈子庄では、看青人の賃金など作物の監視に關わる以外の經費を差務として鄉保に支拂うはずだったが、一部の青苗會の世話役と牌頭が着服してしまつた。

具呈。民人許廣德、年五十歲、務本里圈子庄に住む。

切おもえくわ。身が庄併びに孫家庄の地は共に五頃あり。歷年地畝を按じて出錢し、本里の鄉保黃寶善に給し、差に當つ。……今歲、伊かれ等〔陳二、許旺宗、牌頭許爽〕共に粮二十一石を攤要ちやうしやうし、共とも合に賣價は東錢三百四十六吊五百文あり。内に看青人の工價東錢一百吊を除き、又た青苗會の事を辦するの飯錢五十吊を除き、下餘の錢文は伊かれ等が吞肥し、並なべて鄉保の辦差に交たさず。……道光二十五年九月。<sup>(51)</sup>

ここでは、青苗錢（穀物）の中に含めて徴収された差徭錢が、本來は青苗會の世話役と牌頭から鄉保に支拂われるはずだったことがわかる。

なお差徭錢は、通常、首事人や青苗首事人が先に立て替え拂い（「墊辦」）し、六月と秋の收穫期に實際に農民から徴収された。例えば尙節里の苑家庄では、首事人を卷き込む傷害事件が起きたがそのなかで、「査すらく、王君恆は本庄の首事に係り、各項の差務を墊辦す。從つて妄爲の處無きは、人共に知る所なり」とある。<sup>(52)</sup>また好禮里莊頭庄の首事人蘭德倉の訴えには、「身みれ楊富とともに錢文を墊辦して差に應じ、後を俟まちちて攤辦ちやうはんし歸墊す」とある。<sup>(53)</sup>青苗錢の徴収は、麥秋と大秋の收穫期に行なわれた。

以上、土地數に應じて差徭を負擔する形態について考察し、青苗會の活動と密接に關わつていたことを述べた。青苗錢とともに差徭錢が徴收される場合、車輛と馬匹の差徭（大差）と縣衙門の徴收（雜差）との區別はなく一律に徴收された。また村庄での徴收業務には青苗會の世話役（青苗首事人）、村庄の首事人、或いは牌頭・甲長が關わり、差徭錢は郷保に支拂われた。

#### 四 縣政府の動向と差徭

車股・股分を有力戸が支辦する形態と土地數に應じて負擔する形態は、道光年間（一八二〇～一八五〇）頃まで寶坻縣の鄉村でもに行なわれていたと考えられる。しかし有力戸が支辦する形態は咸豐年間（一八五二～一八六一）以降ほとんど見られなくなり（表1参照）、青苗會の青苗錢と一緒に差徭錢を土地數に應じて徴收する形態が、同治年間（一八六二～一八七四）に廣く實施されるようになった（表2参照）。

直隸省において差徭負擔の不均衡とその過重が大きな問題となり、改革論争が朝廷をにぎわすのは、道光初年のことであるが、改革派の主要な主張の一つに按畝攤派の徴收形態の導入による地方財源の確保と、州縣の陋規索需や規禮饋送など定額外の恣意的な收奪の禁止があつた。この論争は道光二年（一八三二）に、按畝攤派もまた新たな過重を招くものとして現状維持を主張した官僚の側に道光帝が支持を與える諭旨を發布し、結局直隸省の差徭改革は不徹底のままで終わった<sup>(54)</sup>という。順天府の差徭徴收の形態にこうした議論がどのような影響を與えたのか不明だが、鄉村の末端における動向は、十九世紀後半には按地攤錢の方向へと向かうものだった。

例えば尚節里の苑家庄では、咸豐四年（一八五四）に「厘股を按じて攤辦」する形態から「土地を按じて差を攤」てる形態に變化し、首事人と三十畝を耕作する農民との間で傷害事件が起きている。

具呈。民人王君恆、年四十二歲、尚節里苑家庄に住む。



情縁。<sup>こころのしんぐわい</sup>身が庄の差務は向て厘股を按じて攤辦せり。去歲自り明示を遵奉し、閭庄公議して、地を按じて差を攤つるにとす。惟だ張進祿は種地三十畝有るも、分文も出さず。今に至るも拖欠するは、辦公の帳簿有りて憑とす可し。身<sup>わ</sup>れは本庄首事に係り、屢次伊れに向いて催討す。此に據りて結仇するに因り、時常<sup>つね</sup>に身<sup>わ</sup>れを將て辱罵す。……咸豐四年二月三十日。<sup>(55)</sup>

この文面では、苑家庄では咸豐三年以前には、厘股の負擔を受けた農家が差徭を支辨していたが、「閭庄公議」(庄全體での取り決め、實質的には首事人等の合議)をへて、「地を按じて」差徭を割り當てることとなった。「去歲自り明示を遵奉し」とあるので、縣衙門の指示があつたことが推定される。土地數に應じた徵收は、耕作地三十畝を持つ中農の張進祿にとって負擔を増大させるもので、彼は差徭錢を支拂おうとせず、首事人と諍いになっている。

一方、同じ尙節里の太平庄と商王洵庄では、同治三年(一八六四)の訴狀のなかで首事人たちが、「差務の大小を論ぜず俱に地畝を按じて公攤す」ることは、「其の来るや已に久し」という古くからの習慣であつたと主張している。

具稟。尙節里の首事人李分泮・王國太・安永順・李福來・李扶・李枝・方振佐・李文棟。

緣。身<sup>わ</sup>れ「商王洵庄」は太平庄と一圏を爲し事を辦ずるに係る。大小の差務を論ぜず俱に地畝を按じて公攤す。其の來たるや已に久し。意わざりき、「太平庄の」李永年・趙朝祥は攪亂の心を頓起し、伊の庄並びに杜立庄の種地の家の地畝を將て分出し、硬に自ら會を立て經管せんとす。公に假りて私を濟し、身<sup>わ</sup>が庄の居民に差の累を受くる有るを顧みざるなり。近年以來、身<sup>わ</sup>が庄は蕭條にして伊の庄は豊富なり。身<sup>わ</sup>が庄の地畝は多く伊の庄の承種に出ずる有るも、仍お身<sup>わ</sup>が庄の差を攤つるに隨うに係る。……同治三年六月。<sup>(56)</sup>

文面では、本來は太平庄と商王洵庄の二つの村庄が一つの青苗圏を組織して看青の業務を行なっていたが、太平庄の一部の農家と杜立庄の農家が新たに青苗圏を形成しようとして訴訟となった次第が述べられている。訴狀の後半では、大庄で土地(青苗園地)と人が多い太平庄と、土地と人が少ない商王洵庄で青苗圏を分離した場合、商王洵庄の一畝當たりの差

徭の負擔が増大して過重となり、以前よりも不利になることを訴えている。

以上の二つの事例では、按地攤錢が開始された時期に違いがあるが、いずれの場合も十九世紀後半には、「地畝を按じた」差徭の徴收が行なわれている點で共通している。文書の主張は、提訴した者に都合が良いように展開されていることを考慮しても、按保分派から按地攤錢に變化したことから、按地攤錢が舊來からの習慣であることが、いずれもともな理由として主張され得るものだったことは確認できよう。

寶坻縣の差徭の徴收形態が、十九世紀の後半には「地畝を按じた」割り當ての方向へ向かうものであったことを別の角度から見てみよう。

王福明氏は寶坻縣の鄉村の歴史的な變遷を考察したなかで、鄉村の有力者について言及している。<sup>(57)</sup>王氏は咸豐年間（一八五二—一八六一）を境として、鄉保を縣衙門に推舉しその職責を保證した鄉村の社會層が、異なる人々へと移り變わったことを述べ、十九世紀の半ばに、鄉村統治の擔い手が變化することを示唆している。

王氏が考察したのは、鄉村の有力者たちが鄉保の職責を保證した「保狀」（保證書）という文書である。寶坻縣の鄉村において、鄉保は稅糧の督促、打更（夜回り）や人犯の移送など治安維持の業務、牌頭・甲長の推舉と彼らの督率、さらに差徭の徴收などを擔當し、鄉村で最も重要な役割を果たしていた。鄉保は「家道殷實にして歷練老成」な民間人の中から推舉され、縣衙門の承認を受けてその職についた。一方、縣衙門に保狀を提出して、鄉保の保證人（「保人」となった者は、もし鄉保に資力がなく納糧や差徭の職責を果たせなかったり、鄉保が逃亡した場合、代納する責任を引き受けねばならなかった。<sup>(58)</sup>

従って、鄉保が鄉村で選出される過程と、それに関わった人々を考察することによって、縣政府が鄉村のいかなる社會層を媒介として、鄉村統治を掌握しようとしていたのかを知ることができるだろう。王氏によれば、縣衙門からの通達を受けて鄉保を推舉し、また彼らの職責を保證した鄉村の有力者は、車領・幫辦・書手から咸豐年間以降、「首事人が保證

表3：「保状」に登場する人々

	卷87 嘉慶	卷88 道光	卷89 道光	卷90 道光	卷91 咸豐	卷92 同治	卷93 光緒	卷94 光緒
車領・車籤	2	10	8	18	3	1		
帮辦	2	6	9	9	1	1		
書手	3	9	6	9	6	19	3	2
郷保				1	3	2		
民人	1	11	5	19	14	6	6	3
首事人			1		8	26	14	12
牌頭・甲長		2		6				
生員・監生 文生・武生			1	5	5	6	3	5
職員その他		1			3	5	2	6

単位：件

註) 民人、首事人など複数の人数で現れる場合は1件と数えた。

表4：「稟状」「呈状」の提出者

	卷87 嘉慶	卷88 道光	卷89 道光	卷90 道光	卷91 咸豐	卷92 同治	卷93 光緒	卷94 光緒
車領・車籤	4	2	6	4	8	1		
帮辦	1		1	1	1			
書手	7	10	13	9	8	6	1	1
郷保	7	11	17	7	12	11	14	8
民人	7	2	5	2	5	5	3	7
首事人		1	1			5	11	11
牌頭・甲長			1	1			2	
生員・監生 文生・武生			3	2		3		6
職員その他	1	1		1	1	5		3

単位：件

註) 民人、首事人など複数の人数で現れる場合は1件と数えた。

するようになった」という。<sup>(59)</sup>

表3は、筆者が保狀に名前を連ねた人々を検索して統計を取ったものであり、表4は、郷保の選出に關連して鄉村から縣政府に宛てた報告文書（稟・呈）の提出者をまとめたものである。表3と表4に示した『順天府檔案』の卷八七・卷九四は、「順天府實地縣等の、所屬の郷保・首事・書手等の人の選舉と撤換を辦理する問題に關する文件」の部分である。

表3、表4を見ると、郷保の推舉や保證に關與した次の三つの社會層を見いだすことができる。第一に車輜と馬匹の差徭を扱う車領・車籤と幫辦、稅糧徵收を始めとする里内の諸業務の抄錄事務を擔った書手、各保の村庄で治安業務を扱う牌頭・甲長などである。第二は「民人」<sup>(60)</sup>（有力農民）、村庄や青苗會の世話役である首事人など、鄉村の自生的な指導層である。第三は、生員・監生・貢生・文童・文學などの科擧の資格取得者、或いは稟生などの學生、職員・候選訓導などの下級官員である。

これらのなかで、車領・車籤と幫辦は、咸豐年間以降、表から姿を消していく。一方、首事人が多數登場するのは、咸豐・同治年間以降である。表3、表4から、王氏の主張を確認することができるが、その變化は車領・幫辦・書手と首事人との間の關係というよりも、むしろ、里・保内の職役に充當する者から、鄉村の自生的な世話役・指導層への比重の推移として捉えることができるだろう。

即ち、嘉慶・道光年間には主に、車領・車籤と幫辦に充當した人々を介して、郷保に課せられた諸業務や差徭の徵收を縣政府は掌握していたが、咸豐・同治年間以降、その役割は首事人が引き受けるようになった（首事人と民人を介して鄉村を掌握するようになった）と考えられよう。こうした動向から、車領・車籤と幫辦を中心として差徭を徵收する形態から、首事人に依據した徵收形態が主流になっていったことが想定される。

以上、鄉村統治に關わる社會層の考察から、車輜と馬匹の差徭を有力戸が支辦する形態に代わって、十九世紀の半ば以

降には、車輛と馬匹の差徭さらに雜差を、青苗錢に含めて徴收する形態が廣まったことが窺われる。

### おわりに

差徭は、鄉村外部から際限なくまた時を選ばずに科派される負擔だった。そうした農家や鄉村の外部から降りかかる負擔に對して、鄉村では車會を組織したり、青苗會の活動のなかに差徭錢を含めて徴收するなどの對應によって徴發の壓力を受け止めていた。

即ち、道光年間（一八二一—一八五〇）までは、里或いは保から村庄に割り當てた差徭（股厘・車股）を有力戸に負擔させていた。それにともない、鄉村の里役や下層紳士、有力農民等を中心とした車會の組織が形成され、差徭錢の徴收と工面を行なったと見られる。畝數に應じた徴收が廣く寶坻縣の鄉村で實施されるようになるのは同治年間（一八六二—一八七四）頃からであり、この形態では、差徭錢は青苗會が運營される過程で收穫期に青苗錢に含めて徴收された。

以上のように有力戸による負擔という形態から土地數に應じた負擔が主流となっていた背景には、華北において嘉慶年間（一七九六—一八三〇）から顯在化する構造的な差徭徴發の増大があり、<sup>(61)</sup>寶坻縣の鄉村もそうした趨勢の中にあつたと考えられる。直隸省の差徭は山西省や陝西省に比較すれば相對的に輕かつたとされるが、寶坻縣の鄉村では急激に増大する外部からの負擔を「會」組織や鄉村の結合、特に青苗會による差徭徴收という内部的な處理によって切り抜けようとした。按畝攤錢は道光初期の直隸差徭論争で提唱された改革項目の一つだったが、直隸省或いは順天府で正式に導入された形跡はなく、寶坻縣の事例は、多分に鄉村の自發的な動向からの對應だつたと思われる。

しかし、<sup>(62)</sup>青苗會が差徭徴收の機能を持つようになると、次第にその活動は「公務」「辦公」などの言葉で表現されるようになり、<sup>(63)</sup>青苗會の世話役や村庄の首事人は鄉村の有力者として縣政府の鄉村統治に參與するようになった。首事人が、鄉保の推舉に關わる檔案文書に初めてその名前を現わすのは咸豐四年のことで、<sup>(63)</sup>この時期以降、首事人は鄉保の保證人と

して多數、文書に登場するようになる（第四節）。青苗會では青苗錢とともに、差徭錢や村庄の公共業務を遂行する經費が徴收され、會の經費としての金錢の出納が恒常化していったと考えられる。青苗會は本来、作物の監視を行なうために組織された郷村の團體にすぎなかった。しかし、差徭の徴收團體として活動するようになって以降、青苗圈内の公共業務——村道の補修・村廟の修理・演戲の招致などの機能と合わせて、次第に村庄を範圍とした協同團體の姿をとるようになったと推測される。

二十世紀の初頭に日本の諸機關は華北平原の幾つかの村で農村實態調査を実施したが、そのなかで青苗會は村役場、村公會の役割を果たしていた。『中國農村慣行調査』に基づき、一九四〇年代の青苗會を考察した旗田巍氏は、青苗會が看青（作物の監視）と攤款（縣政府や警察への上納金と力役）の徴收という二重の性格を備えていたことを指摘している。<sup>(64)</sup>清代における差徭の徴收團體という歴史的な前身は、二十世紀の青苗會に受け継がれていった。

差徭という郷村外部からの壓力は、郷村の内部にそれを受け止める「會」組織などの協同の裝置を促し、さらに郷村の姿を變容させていったと言えよう。

## 註

(1) 『清國行政法』第三卷 第一編第八章第三節郵驛 三三八  
〜三四一頁。片岡一忠「清代後期陝西省の差徭について」

『東洋史研究』第四四卷第三號 一九八五年。

(2) 岩井茂樹「中國專制國家と財政」『中世史講座』第六卷  
學生社 一九九二年。また華北の差徭に関する先驅的な業績  
としては、藤岡次郎氏の一連の論考がある。藤岡次郎「清朝  
における徭役に關する一考察——清朝地方行政研究のための  
ノオトⅢ——」『北海道學藝大學紀要』（第一部B）第一三

卷第一號 一九六二年、同前「清代直隸省における徭役につ  
いて——清朝地方行政研究のためのノオトⅣ——」『北海道  
學藝大學紀要』（第一部B）第一四卷第一號 一九六三年、同  
前「清代の徭役」『歴史教育』第二二卷第九號 一九六四年。  
(3) 二十世紀初頭に東亞研究所、滿鐵など日本の諸機關が華北  
の各地において行なった農村實態調査では「會」「社」と呼  
ばれる農村組織、結合が村の内外に存在していたことを報告  
している。こうした農村組織や結合は、農業生産、農民の娯

樂・金融・信仰など農民の日常生活に不可欠な組織として、華中・華南ほどの結集力を持たない小規模な宗族とともに華北の鄉村社會を形成していた（中國農村慣行調查刊行會『中國農村刊行調查』岩波書店 一九五二年～一九五七年、第一卷・一七五～一七六頁、第四卷・四五〇～四五一頁など。

Prasenjit Duara, *Culture, Power, and the State: Rural North China, 1900-1942*, Stanford Calif.: Stanford University Press, 1988. Chap. 5. 拙稿「清代の華北農村における青苗會について——嘉慶年間以降の順天府寶坻縣の事例より——」『史料』第七八卷第一號 一九九五年、拙稿「十九世紀の順天府寶坻縣における『村庄』と『村庄連合』——清代華北における農村組織の一考察——」『愛知大學國際問題研究所紀要』第一〇七號 一九九七年、拙稿「華北農村における社會變化と同族結合——山東省後夏寨村の事例——」『アジア經濟』第四〇卷第三號 一九九九年。

- (4) 山本進「清末山西の差徭改革」『東洋史研究報告』（名古屋大學）第一九號 一九九五年、同前「清代後期直隸・山東における差徭と陋規」『史料』第七九卷第三號 一九九六年、同前「清代河南の差徭と當官」『社會經濟史學』第六四卷第二號 一九九八年。

- (5) 註(2)岩井論文、また岩井茂樹「徭役と財政のあいだ——中國稅・役制度の歴史的理理解にむけて——」(一)(二)(三)『經濟經營論叢』（京都産業大學）第二八卷第四號・第二九卷第一號・第二號・第三號 一九九四年。

- (6) 中島樂章「明末徽州の里甲制關係文書」『東洋學報』第八

〇卷第二號 一九九八年では、里に科された稅役負擔に對應するため、里長戸が合同を交わしたり、獨自の財源を設けたりした事例を紹介している。

- (7) 註(2)藤岡論文「清代直隸省における徭役について」。

- (8) 拙稿「中國第一歴史檔案館所藏の『順天府檔案』について」『史料』第八一卷第一號 一九九八年参照。

- (9) 例えば、次の事例は甲長が戸口の編査を理由に錢文を着服しようとした事件である。

爲傳案訊明究辦事。據與保里白家莊民人王金聲等公稟、本庄甲長趙鳳九素行不端、指編查戶口詐索錢文肥己。……

嘉慶十九年閏二月初六日。『順天府檔案』卷一五三。また、次の事例は差徭の徵收に當たり鄉保が逃亡したものである。

具稟。德義里書手王奎發。

爲稟明事。切。身里鄉保劉萬臣、遇差潛逃、蒙恩諭飭身里首事人等選舉安人接充鄉保。奈首事人閻文印・高文琢・張自立・侯君仲・王彩珍等、至今並不選舉。……

- 同治六年八月。『順天府檔案』卷九二。

- (10) 光緒十二年刊本『順天府志』卷五一・食貨志三。

- (11) 「荊州徭目凡二十一、一、大差平地修橋攤之」「一、陵差之車民戶、分四十股、攤十之七」「一、東陵差、及官兵過境、驛馬不敷、則以差錢買支約馬二十至四十不等」「一、西陵差」「一、驛馬穀草」「一、督學使過境、分二十八保、立車戶應之」「一、歲供西陵・兵部・內務府監」「一、歲供東陵祭祀」「一、官兵餉藥等項、其軍發直雇應」「一、東陵祭

祀」「一、十二阿哥園寢祭祀柴炭」「一、東陵祭祀有冰車戶」「一、工部取硝」「一、歲解道書飯食銀三十六兩」「一、府繕書募充給照」「一、太常寺行取都城隍廟戶五名」「一、荊州白澗香華庵地近行宮」「一、荊州繕書兵驛房十九、兵清房二十一」「一、馬蘭鎮右營守備分汛赤霞峪火夫三十」「一、景陵樹戶四十八」「一、州境鋪司六十名」(光緒十二年刊本『順天府志』卷五一・食貨志二)。

(12) 藤岡氏は、「大差」を中央政府の官員の往來に關連した經費の負擔、「春秋兩差」を皇帝の取り行なう行事に關わつて收取される經費、「雜差」を地方衙門の公的業務の經費を補う徴收とみなしている(註(2)藤岡論文「清代直隸省における徭役について」)。また片岡氏によれば、祭陵の欽使に對する差徭の提供を「陵差」と稱した(註(1)片岡論文「清代後期陝西省の差徭について」)。

(13) 張杰「論差徭書」では直隸の地方衙門の差徭について次のように述べる。「至於雜差累民尤甚。如米車、如煤車、如酒車、如委員過境車、如料、如墊、如炭、如天棚、如挑夫、如柵欄、如井蓋、如井欄、如棗刺、如劈柴、如枝子、如梳楷等項、種々名目離奇古怪、悉難枚舉。俗云、衙門一點朱、民間一片血、不誣也」(『皇朝經世文編』卷三三戶政・賦役五)。

(14) 乾隆十年刊『寶坻縣志』卷六・鄉閭では、鄉村の行政區劃を四鄉——二〇里——四五保——九一〇莊(庄)と記している。

海濱鄉——慈恩里(三保)・孝行里(二保)・興保里(五保)・

居仁里(四保)・承化里(三保)。

廣川鄉——和樂里(二保)・好禮里(二保)・尚節里(二保)・

寧海里(一保)・嘉善里(一保)。

望都鄉——安成里(一保)・務本里(一保)・廣孝里(二保)・

進賢里(一保)・新得里(三保)。

渠陽鄉——善教里(四保)・厚俗里(三保)・新安里(一保)・

崇智里(二保)・德義里(二保)。

(15) 『順天府檔案』卷一二三「爲粟明派差、不公叩 恩俯念里窄民窮、恩准減辦馬差事」。

(16) 爲粟明派差不公叩 恩俯念、里窄民窮、恩准減辦馬差事。

緣。陳啓昆所管車籤、有崇智里新集鎮車籤二隻。係屬大保二十餘村、及身等小保車籤等處。禍因身幫辦閻靜遠、同身鄉保張明遠、於上月進城辦理夫差。詎陳啓昆將身等喚至伊科中、向身等云稱、硬欲指差詐索銀三十兩、交伊即可免辦馬差等語。身等因里小寒苦、本未應允不料。因未遂其願、而陳啓昆今果派馬差濫派。身里小保馬差二匹隨帶工料六十餘日、現蒙 票飭備辦、有馬價工料、須用銀百十餘兩、但身查伊之所管崇智等里、大保均無車馬差務。顯係伊倚恃兵書、視小民爲魚肉、稍不遂意、即以大差混□、身等實難辦理、爲此邊 票呈明。……道光九年八月。『順天府檔案』卷一二三。

(17) 註(14)參照。

(18) 『順天府檔案』卷九六「呈送寶坻縣詳稿」。缺字があるため原文を掲げておく。

……該縣辦差舊章、向係按保分派。與保里一保、連霍庄



共有□□庄、計一百一十五厘股分。仍按村庄大小。分認派辦、每村自數厘至十數厘。□□□□家庄係四厘股分。每保選充車領二人、經理分派差股。各村又有幫辦、在於里下飲辦差錢。或交鄉保、或交原催差役、經收備辦應差。……道光十九年七月三十日。

(19)

『順天府檔案』卷二四八「爲喊稟事」。

(20)

「股」とは本來、共同出資の分擔を指している。『順天府檔案』の他の事例では、各人の持ち分或いは割り當てのことを「股」「股分」と表現している。例えば、

具呈。民人呂守才、年四十七才、住厚俗里小北臺庄。

爲情急喊稟事。切。身庄後舊有流水溝一個、閤庄人等均在此處捕魚。每家出人二名、所得魚魴、按各家分劈。不料昨於〔同治十年八月〕十八日、有在股捕魚王貴之親誼徐德向家瞧着、並不向身在股人等通知。伊私自硬將身等一夜之間、所得魚魴、全行拿去。……同治十年八月十九日。『順天府檔案』卷一五七。

具呈。民人孟從堯、住興保里小塔沽庄。

切。身庄凡遇水患之年、閤庄人等赴窪地置魚、公分錢文。今歲有身庄孟尙言及、去大人者應分一股、去孩童者應分半股、公議身家經營此事。……道光二十九年正月。『順天府檔案』卷二〇五。

これらの事例では村庄内での村人としての得魚の權利や割り當てを「股」「一股」と表現している。車股、股分とは、差徭の割り當て（負擔分）を指すと考えられる。

(21)

王福明「鄉與村的社會結合」從翰香編『近代冀魯豫鄉村』

中國社會科學出版社・一九九五年 三七頁。また他に、

具狀。尙節里車領鄭純修・楊漢、幫辦鄭永寬・楊永安・劉大如・邵文泮・田自盈・劉占魁・周振邦。住邵家鋪等庄。

切。身等本里鄉保鄭瑜、因悞卯蒙恩將伊枷號。身等何敢冒瀆。情。身里夫差・車差係分股裡・股外奉辦、股外差務、應鄉保承辦。……道光二十四年六月。『順天府檔案』卷九〇。

(22)

例えば、樊成顯（岸本美緒譯）「明末清初庶民地主の一考察——朱學源戸を中心に」『東洋學報』第七八卷第一號一九九六年では、特定の納稅戸の名義が實は複数の糧戸を含んでいたことを明らかにしている。

(23)

「具保狀。厚俗里書手李和桂、車領趙名山、幫辦馮輝山・王德遠・王緒・馮興基・方玉生・閻洪如、民人孫盛清・呂甫用・王福和・李福堂・楊玉山・劉寶山・馮大力・楊殿林」という「保狀」の書き出しでは、幫辦は六名である。また註(21)参照。

(24)

『順天府檔案』卷八九「爲遵傳稟明下情、叩恩俯准差傳各庄牌甲、股裡幫辦公舉鄉保事」。

(25)

次の事例では、車馬の大差は車領と幫辦の擔當であり、傷害事件の犯人の搜索と護送は牌頭と甲長の職責としている。

具稟。新得里幫辦車領劉富、車籤散股劉同。

爲叩懇仁慈俯鑒下情施恩摘釋事。切。因本庄王八等、將馬家庄董自發、毆傷具控在案。王八潛逃、蒙恩堂訊、飭查協同鄉保王連登、併牌甲人等訪緝王八送案訊

究。但身劉富素在本里車領、杜桂枝籤下認充幫辦車領辦查。因此案假以身爲本庄牌頭、身劉同亦車籤內出散股幫查、反以身爲甲長、係該鄉保不查底裡。……況身劉富實非牌頭、身劉同亦非甲長。誠恐俟後再遇牌甲專辦差務、復妄牽扯、身等受累、惟懇 恩天批斷備案、身等以便隨車領專辦車馬大差無誤。爲此稟懇。……道光三十一年。『順天府檔案』卷二一。

- (26) 蒲地典子「清季華北の『鄉保』の任免——中國第一檔案館藏『順天府全宗』實地縣檔案史料の紹介を兼ねて——」『近代中國研究彙報』第一七號 一九九五年、同「清末華北における鄉保の敲詐・勒索」『近代中國研究彙報』第一九號 一九九七年 參照。

- (27) 『順天府檔案』卷八九「具保狀與保里車領于大湖、幫辦張興思・于大保、書手劉步雲。今於與保狀事」。

- (28) 『順天府檔案』卷一五四「爲稟明下情、懇恩差傳具保、以免悞差事」。

- (29) 同様に鄉保の選出に關する文書には次のようにある。

具稟。新安里書手白林。

爲具明選舉鄉保事。切身里鄉保王起先潛逃、現蒙票飭、身會同車領人等、選舉安人驗充等因。……道光十年閏四月。『順天府檔案』卷八八。

具保狀。好禮里書手王成謨、車領陳秉文、民人李宗遠・許貫一・李瑞生・張廣安・趙奎・張玉山・趙盛公・杜瑞符・楊美中・杜景太。

今於與保狀事。……身等遵諭、會同本里士民人等、公議

得廣林木庄民人孫玉亭、家道殷實、爲人老成。……道光九年九月。『順天府檔案』卷八八。

- (30) 『順天府檔案』卷八七「爲陳明下情年老子瘋、難以辦公、懇恩電鑒准退事」。

- (31) 『順天府檔案』卷一五三「爲違批陳明事」。

- (32) 「車頭鄧昌太」は次の文面にも現れる。

爲回明事。切有德義里車領……、車頭鄧昌太・舊鄉保王太和、將黨樹所欠王君度車錢、歸結清楚、據實稟覆等因。……嘉慶元年九月二十七日。『順天府檔案』卷一五三。

- (33) 『順天府檔案』卷一五三「爲待衿包攬車差、抵害窮民、硬行詭詐、叩天恩准訊究事」。

- (34) 旗田巍「廟の祭禮を中心とする華北村落の會——河北省順義縣沙井村の辦五會——」小林弘二編『舊中國農村再考——變革の起點を問う』アジア經濟研究所研究双書三五二、一一八頁。一九八六年。內山雅生『中國華北農村經濟研究序說』金澤大學經濟學部研究叢書四 一九九〇年 第五章 參照。

- (35) 「車簿」はまた「車冊」とも呼ばれた。「況查本里各庄居民、即有盈餘錢戶、俱在車冊、出股辦查、得難據股。『順天府檔案』卷九一。

- (36) 『順天府檔案』卷一五三「爲公叩仁慈俯念、鄉愚細故、業經查明處結、恩准免訊事」。

- (37) 註(34)旗田論文「廟の祭禮を中心とする華北村落の會」一

一七頁、一三二頁。

- (38) 『順天府檔案』卷二四八「爲詐索無休、害衆肥己、懇恩作主訊究事」。

- (39) 福武直氏は首事人を會首・會頭と同様の「村公會の理事者」としている（『中國農村社會の構造』福武直著作集第九卷 東大出版會 一九七六年 四〇九頁）。『順天府檔案』では、村の公共事業や村廟の管理を行なう世話役として現れる。例えば、村道の修理については次のようにある。

具呈。民人雍天祥、住嘉善里小張各庄。

切。於本月初七日、有身庄首事人劉百義等公議修墊庄南小道一條、每家出夫一名、赴庄南修道。身因赴地耕種、令身弟雍五兒、現年十四歲、赴庄南修道。有宋林兒、在身庄東坑內打雀、着身弟五兒與伊找蟲。身弟言說赴庄南修道、無暇找蟲。宋林兒嗔怒、將身弟辱罵。身弟隱忍、仍去修道。不料宋林兒之父宋國臣氣怒。…… 同治六年四月。『順天府檔案』卷二二二。

- (40) 『順天府檔案』卷八九「爲稟明事」。

- (41) 「經管地畝」とは、青苗園地を管理するという意味で、青苗錢を集め青苗會を運営するという文脈ではしばしば使用される。例えば、

具狀人周云安。年六十二歲係督目、住厚俗里劉舉人庄。爲賊稟事。切。身閑庄僱有看青人杜成望。言明一季僱價東錢十五吊。身亦經管青苗地畝辦事。…… 道光三年七月。『順天府檔案』卷二〇七。

- (42) 屠之申「敬籌直隸減差均徭疏」道光二年「至百姓承辦差

務、歷保按地刁攤、無如奉行不善」（『皇朝經世文編』卷三三・戶政八）。

- (43) 註(3)拙稿「清代の華北農村における青苗會について」參照。

- (44) 『順天府檔案』卷三三一「爲倚恃首事捏詞妄控、懇恩添傳實訊、以辨眞僞事」。

- (45) 『順天府檔案』卷二〇三「爲兇徒攪亂公務、持刀尋衅、叩恩作主訊究事」。

- (46) 註(3)拙稿「清代の華北農村における青苗會について」七頁 參照。

- (47) 穀物の場合、通常は糧三合（一升とされるが、差徭を含めた場合、麥子一升四合）①好禮里大蘭各庄、糧一升二升（②務本里園子庄）となっている。

- (48) 註(4)山本論文「清代後期直隸・山東における差徭と陋規」。

- (49) 岩井茂樹「公課負擔團體としての里甲と村」『明清時代史の基本問題』中國史學の基本問題シリーズ四 汲古書院 一九九七年 では、公課の負擔組織が順調に運営されるためには「團體としての求心性と、内部での負擔の公平性」が保證される必要があったと述べている。

- (50) 『順天府檔案』卷九二「爲稟明貪食鄉保、混行捏稟、懇恩查情核奪、以免妄生枝節事」。

- (51) 『順天府檔案』卷一〇〇「爲賊稟事」。

- (52) 『順天府檔案』卷一一六「爲公呈下情事」。

- (53) 『順天府檔案』卷九四「爲接充鄉保、阻撓不還墊錢致受逼

累、叩恩併案傳追事。

(54) 註(2)藤岡論文「清代直隸省における徭役について」、註

(4)山本論文「清代後期直隸・山東における差徭と陋規」。

(55) 『順天府檔案』卷一一六「爲挾嫌忘控、誣陷良民、懇恩迅究、以儆惡事」。

(56) 『順天府檔案』卷一〇四「爲遵批再稟下情事」。

(57) 註(21)王論文參照。

(58) 註(26)蒲地論文參照。

(59) 註(21)王論文參照。

(60) 「民人」とは一般農民を指すが、保狀や、鄉保の推舉に關わる文書に登場する民人が、一般農民や貧窮農民だったとは考えにくい。例えば、次の保狀では、民人は有力農民だったことがわかる。

具保狀。嘉善里口東等庄民人于光厚・王鳴岐・張寺來、

書手王浩。

今於與保狀事。切。身里鄉保王和、蒙恩示革、荷蒙諭飭

身等選舉安人接充鄉保辦公。今身等公同選得口東庄民人

崔廣厚、家道殷實、老誠練達、堪充本里鄉保辦公、不致

有悞。身等情願出具公保。所具保狀是實。嘉慶十四年

六月。『順天府檔案』卷八七。

この文面で新たな鄉保として登場する「民人崔廣厚」は、

「家道殷實にして老誠練達」とあり、また保證人として名前

を連ねる「民人于光厚・王鳴岐・張寺來」の三人も、車領・

幫辦に相應する里内の指導層か、口東庄などの村の實質的な

世話役だったと考えられる。

(61) 註(2)岩井論文「中國專制國家と財政」四・正額外財政の擴大。

(62) 具狀。職員朱自信、年五十三歲、住與保里八門城。

切。因今歲大秋青苗地畝、職同本庄辦公事人周會三・劉

美中・李光國・孫澤安等公議、職庄馬天章・馬俊如・劉

萬榮等九人、看青業已議定、立有合同攬看青苗字據。：

道光七年七月。『順天府檔案』卷二一五。

具呈。民人褚寬、年六十四歲、住尚節里褚庄。

切。身係本庄首事辦理公務。昨經褚福・褚萬和・吳壽

增・吳四・吳秉衡・褚萬鳳・王老、私自議明着各種地之

家、每畝出錢一百六十文、並未向身告知。……同治八

年九月。『順天府檔案』卷二二九。

(63) 次の文書は、鄉保の推舉に關わつて、初めて「首事」とい

う言葉が現われる報告である。

具稟。壯頭王福山。

爲回明事。切。奉諭飭令與保里里書・首事、並車領人

等、作速在於本里選舉殷實公正二人、擇充已故鄉保馬

得山遺欠辦公等因。役遵即往飭、查伊里並無里書、亦無

車領、且首事均無名、現有鄉保同里鄉保王得明、可以會

同該里首事人等、議舉殷實公正安人、接充馬得山鄉保辦

公。奈因票內無伊之名、難以飭辦、理合回明、叩乞

太老爺恩准均票內添註王得明、以凭飭辦施行。上稟。

咸豐四年閏七月 日。『順天府檔案』卷九一。

(64) 旗田巍『中國村落と共同體理論』第五章。岩波書店 一九

七三年。

dong province in January of the 25 th year of Qian-long 乾隆. Among the records documenting the accommodation and repatriation system in the Qing dynasty, the ones concerning the “Sanyou Iriomote” Sen are the most detailed.

This essay investigates the repatriation and consolation system of Ryukyu refugee under the Qing dynasty by referring to the “Sanyou Iriomote Sen” shipwreck and other cases of consoling drifting ships in the same period. It particularly examines the content of this system and the related administrative documentation and distribution processes during the Qian-long Era.

**THE CHAIYAO 差徭 AND QING-MIAO HUI 青苗會 IN  
THE NORTHERN CHINA DURING THE QING: A CASE  
OF SHUN-TIAN FU 順天府, BAO-DI XIAN 寶坻縣 SINCE  
THE YEARS OF JIAQING 嘉慶**

ODA Noriko

It was the common practice that local governments collected taxes from the peasants in rural society under the name of the duty of long distance relay in case of budget shortage in the northern China. The expenses, levied from rural society due to budget shortage were called chaiyao. Chaiyao was an important source for local budget which was unflexible, but from the peasant's standpoint, it was a serious pressure on them as it was levied irregularly as the local government's pleases.

To cope with the heavy payment of chaiyao, the peasants joined the rural organizations like che hui 車會 and qing-miao hui. Before the years of Jiaqing and Daoguang 道光, leading members in the village paid the expenses assigned by local governments. Under this way of levying chaiyao, they formed che hui in order to collect the chaiyao money. In the years of Tonzhi 同治, the way of levying chaiyao on a land basis became common in rural society. The chaiyao money was collected as part of the qing-miao money, and became part of the activities of qing-miao hui. The increase of chaiyao which had been started clearly from the Jiaqing years brought

this change of the levying way. The peasants got over the rapidly increasing expenses by participating in rural organizations, particularly qing-miao hui.

Qing-miao hui was an organization guarding harvest originally. But we can conjecture that it was gradually transformed into a cooperate association providing public services such as repairing village roads and temples in rural society while it was going to perform the task of levying chaiyao. In fact, this expanding function can also be found in the qing-miao hui of the 20th century. Based on rural surveys in the 20th century, qing-miao hui not only guarded harvest but also filled the budget shortage and labor of local governments.

## THE RURAL SYSTEM AND RURAL CLERKS IN THE QING PERIOD—A STUDY OF LOCAL DOCUMENTS ABOUT THE DONGTING SHAN 洞庭山 DISTRICT, SUZHOU 蘇州—

YAMAMOTO Eishi

This paper discusses how the rural clerks functioned and maintained the social system in the Dongting Shan district of Suzhou by referring to the three local documents, *Dongting Shan Jinge Xianzong An* 洞庭山禁革現總案, *Taihu Beikao* 太湖備考, and *Taihuting Dang-an* 太湖廳檔案.

In 1766 the local government prohibited the xianzong 現總, the rural clerk system that had many times been abolished but reestablished, and instead put the general affairs of rural communities into the hands of a new rural clerk system called dizong 地總. The dibao 地保 described in *Taihuting Dang-an* appear to have devoted themselves to the interests of the village people and do not suggest the traditional villain. In effect, such rural clerks had the same nature as the dizong.

What the people in the Dongting Shan district expected of the rural clerks in the mid-18th century was to revive the rural system and thus ensure stability. The local documents studied here demonstrate that the structure remained fundamentally unchanged until the end of the Qing period.